

クリストフ アンドリュー シブニエヴスキイ

ポーランド出身

筑波大学 人間総合科学研究科感性認知脳科学専攻 博士課程

1. 自由テーマ

留学の目的はホストの国を体験することだけではなく、自分の国に関する理解を深める義務もある。このエッセイを通して歴史に原因がある現在のポーランド事情を紹介したいと思う。

最近、国際的なニュースに現れるポーランドを巡る話の殆どは恥ずべきことだ。現代では想像し難いかもしれないが、かつてポーランドは文明化の先駆者であった。15~17世紀、ポーランドの黄金時代、西ヨーロッパは宗教戦争に夢中であった時、ポーランドは法律に”宗教の自由”があった。ユダヤ人が差別されドイツやフランスなどから追い払われた時、彼らを受け入れたのはポーランドだった。殆どの国々の王が親から受継いだ王座の力で国民に自分の意思を押し付けていた時に、ポーランドの王は選挙で選ばれていた。王が決めた法律、歳出計画、戦争宣言などは全国議会の承認を要した。西ヨーロッパでローマ聖教に逆らったガリレオ・ガリレイが迫害されていた時、ポーランドでコペルニクスは学術的な革命を始めた。イギリス、スペインなどの植民地の人々が屠殺され、奴隸にされた時に、ポーランドの支配地域では、肌の色などに関わらず皆がポーランド国民として法に守られていた。国が潰された後でもポーランド人はその気概を抱いていた。自分の国がなくなても、アメリカの独立戦争や南北戦争では民主主義の概念と奴隸制の廃止のためにポーランド人は戦っていた。祖国復活のためにナポレオン軍に入ったポーランド人は、ハイチ原住民の独立運動を抑える任務を与えられたが、フランス人によるハイチ人への酷い扱いを目撃すると脱走兵となり彼らと共に戦った。第

二次世界大戦時、ナチスドイツの支配領域となったポーランドでは、西ヨーロッパとは異なり、どんな形でもユダヤ人を援助すれば“犯罪”で、その罰は死刑だった(対象は容疑者だけでなく、その家族や、場合によって村の住民全員に及んだ)。それでもユダヤ人を助けたポーランド人は数十万に及ぶ。「諸国民の中の正義の人」(イスラエル政府が認めた命をかけてユダヤ人を助けようとした非ユダヤ人)はポーランド人が最も多い。勿論ここで一千年以上の歴史をまとめる事は不可能であり、多数のニュアンスまでは説明しきれない。完璧な国も社会もないが、ここで主張したいことは昔のポーランドは多文化、自由と寛容で(比較的)豊かな国であった。

しかし、1795年年のポーランド分割の結果ポーランドは消滅し、凡そ200年に渡りポーランド人のメンタリティーは変化してしまった。まず123年間に渡ってプロイセンとロシアに支配されていた元ポーランド国民は激しい弾圧を受けていた。ポーランドの言葉、文学、歴史などを消滅させるための法律が確立され、それに従わなかった人物は逮捕や追放され

(1920年にポーランドから9,000キロ以上離れた東アジアの地域にポーランド人孤児がいた理由である)、多くの科学者、作家、詩人、貴族などが他国に移住するしかなかった(ショパンやキュリー夫人がフランスなどで活躍していた理由である)。1939年にフランスとイギリスがドイツ侵略時の軍事援助の約束を破り、ポーランドは再びナチスドイツとソ連に分割された。ほんの5年間でナチスと共産主義政府はポーランド社会絶滅を目的にアーティスト、科学者、または様々な士官の抹殺を行った。

戦争終結後も、再び裏切られてポーランドはソ連に支配に渡され、44 年間に渡って圧迫、観察、歪んだ歴史と宣伝が日常になった。その頃、社会的・経済的な成功は個人の努力や特質ではなく、共産党の立場での成果だった。ポーランドの文化を死守し、寛容と利他主義を心に抱いていた人物は抑圧的な「法律」に逆らい激しい刑罰を受けた。一方、共感性に欠く者は繁栄し、社会の上位へと勧められた。政府や警察は民衆に仕える者ではなく、弾圧の機関と化した。こうしてポーランド人は自己中心的になり、政府、隣の人か他国の人を信頼できずシニカルな民族になってしまった。ここであるポーランドの詩を紹介したい。1921年生まれのTadeusz Różewicz (タデウシュ ルジェヴィチュ) の詩「Ocalony (救われた者)」は第二次世界大戦直後の情況を描いたが、80 年後の今もその内容が残響すると思う。

「救われた者」

タデウシュ ルジェヴィチュ

Tadeusz Różewicz

(翻訳: K.A. シブニエヴスキイ)

24歳の私は

虐殺から

救われた

これは空で意味が同じ言葉だ:

人間と動物

愛と憎しみ

敵と味方

闇と光

人間は動物のように殺される

私は見た:

もう救われない

切りっぱなし人間に満たされたトラック

概念は単語に過ぎない:

美德と悪徳
真実と嘘
美しさと醜さ
勇気と臆病
美德と悪徳の重さは等しい
私は見た:
同時に
善良で悪徳的な人

視覚、聴覚と言語を私に戻してくれる
再び物事に名を付けてくれる
闇と光を分けてくれる
指導者か師匠を探している

24歳の私は
虐殺から
救われた

出典: HP 「Poezja.org」
https://poezja.org/wz/R%C3%B3%C5%BC%C5%BCewicz_Tadeusz/1187/Ocalony

私の世代は戦争、占領などを経験したことがないが、それを経験した親と祖父母などに育てられ、止むを得ずそのメンタリティーを受け継いでしまったと思う。だからこそ私のように多くのポーランド人は留学せねばならないと思う。前世代のメンタリティーから離れて新たな視点から全てを考え直すべきであろう。

更に、留学を通して「再び物事に名を付けてくれる」と出会い、意味がなくなった概念を再び理解出来るようになる。例えば、シニカルなポーランド民族に属する私は2年前に坂口財団の奨学生に推薦され、応募した時に民間の奨学生は会社が免税となるか、他の利益を得るために作業にしか過ぎないと想い込んでいた。なぜなら、現代のポーランド人のメンタリティーから生じたことわざ通り「タダで貰えるものは顔を殴られることぐらい」と思っていたからだ。だが、面接の日にすでにその仮説が合

わないので、普段通り履歴書と研究計画か将来計画のことだけではなく、趣味や日本の映画などの雑談も行い、会計年度の報告にのせる項目ではなく、人として接してくれた。その後も、私が送ったハガキやメール、様々なエッセイはただの紙の証跡ではなく、毎回コメントか感想を含めた返事をしてくれたり、花見、歌舞伎、東洋文庫、富士山を巡る文化などを私たち留学生に紹介したりして、財団の方々は時間と努力を込めて純粋に自分の国の文化を共有し、自分や会社ではなく日本の利益になるために留学生を支えていると分かった。このように、私にとっての愛国心と利他主義の意味は少し変わった。これだけで、ポーランドの社会革命が始めると思わないが、小さな変化を重ね、いつか砂でも山になる。

2. 奨学生期間中にできたこと・将来計画

何時、何処で何が起ったという情報を囲むエピソードの記憶は日常性生活に欠かせないものである。新しいエピソードの記憶を長期の記憶に固定するのは海馬という脳の組織の役割の一つである。高齢化に伴う記憶力の劣化は高齢者の自立性を阻害する。私の記憶の仕組みを巡る研究は記憶障害の治療または予防に貢献すると希望し、博士課程の終了後も研究をボスドクとして続けていきたいと思う。将来は母国において日本と肩を並べる研究室を設立に欠かせない知識、経験とスキルを得て、最終的に次世代のポーランド人に伝え、日本と他の国の同僚と共に神経科学をさらに発展する研究者を育てたいである。

過去2年間に渡って、遺伝子組み換えかオプトゲネティクス(光により神経細胞の活動を制御する技術)などに必要な知識とスキルを身につけて、動物の海馬に記憶固定化を促す脳波パターンを人工的に誘導出来た。現在はその人工的に誘導された脳波によって記憶固定化を改

善させられるかまたはその脳波と記憶に関する分子的な仕組みとの関連を検討中である。緊急宣言などに伴ってスケジュールに遅れが生じたが、5月ごろデータ習得完了する予定である。

今年は、去年から行っている英語ジャーナルクラブ(学術論文を巡る討論の授業)のティ칭・フェロー(TF)及び、専門科学英語(英語で研究を巡る発表の演習)の授業に加え、人間総合科学基礎論という科目を他のTFと共にゼロから計画し、初めて演習ではなく講義の形で授業を行えた。絶えず1時間に渡って話をし、初めて講師の苦労が分かった。このような経験は将来の目的を果たすには欠かせないであろう。

最後に、この2年間で少しエッセイっぽい文章を書けるようになったと思う。先行研究のまとめと学術的な問題の紹介を巡る序論、実験操作の細かい説明とデータに基づく結論のことをできるだけ単純で直接の言葉で書くことに慣れすぎ、最小は自分の意見しかに基づけられない感想文などを書く事は毎回困っていた。小さな事だが、これも大切にする経験である。

2021年2月